おくのほそ道

種の浜　―　現代語訳　―

（八月）十六日、空が晴れたので、ますほの小貝を拾おうと、種の浜に舟を走らせる。海上（の距離）は七里である。天屋なにがしという者が、割籠（に入れた弁当）と小竹筒（に入れた酒）などをこまごまと用意させ、従者を大勢、舟に乗せて、追い風を受けて、ほんのわずかな時間で（浜に）吹き寄せられて着いた。浜には粗末な漁師の小さな家があり、わびしい法華宗の寺（本隆寺）がある。ここで茶を飲み、酒を温めて（飲み）、（時間を過ごして迎えた）夕暮れの寂しさは、非常に感動的であった。

寂しいことだ、（『源氏物語』に書かれている）須磨（の秋）にまさる（この）浜の秋は。

（色の浜に寄せる）波の間に、小さな貝にまじって、萩の花の塵（散った花びら）がある。

その日の（行楽の）あらましを、等栽に書かせて、寺（本隆寺）に残す。